

窓のない地下空間を
明るい印象に変える作品や、
検査・治療前にした不安な気持ちが
やわらぐような作品を展示しています。



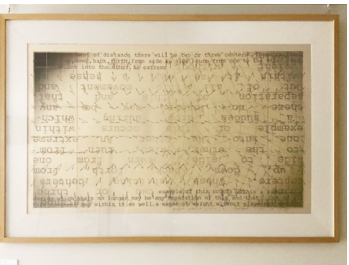
展示作品リスト

- ① 宮本順三〈チベットラサの雪嶺節〉1986年(大阪国際がんセンター所蔵)
- ② 宮本順三〈青海の祭り〉1988年(大阪国際がんセンター所蔵)
- ③ 荒川修作〈WEIGHT WITHOUT PLACE NO.2〉1981年
- ④ 荒川修作〈DISTANCE OF FORMING / MODEL BY MODEL / THE〉1980年
- ⑤ 三木淳〈華のある風景(サイパン島)〉1989年
- ⑥ 三木淳〈華のある風景(グアム島)〉1989年
- ⑦ 三木淳〈華のある風景(サイパン島)〉1988年
- ⑧ 三木淳〈華のある風景(ミコノ島)〉1989年
- ⑨ 三木淳〈華のある風景(ミコノ島)〉1989年
- ⑩ 三木淳〈華のある風景(ミコノ島)〉1989年

宮本順三

- ①〈チベットラサの雪嶺節〉(左)
- ②〈青海の祭り〉(右)

「祭り」と踊りをテーマに、チベット族の伝統行事やチベット仏教の祭りの様子を色彩豊かに描いた作品群。窓のない地下空間に、光に溢れる空や人々の信仰と営みを想起させるような作品を展示することで、彩りと賑やかで明るい空間を演出します。



荒川修作

(あらかわしゅうさく 1936-2010年 愛知県名古屋生まれ)

1956年武蔵野美術大学に入学(のちに退学)。1957年に第9回読売アンデパンダン展に初出品し、美術批評家・瀧口修造に注目されます。1962年には公私ともにパートナーとなる詩人・美術家のマドリ・ギンズと出会い、ニューヨークを拠点に創作活動の幅を広げていきます。文章と図式を用いて、鑑賞者に思考実験を促す絵画作品「意味のメカニズム」(1963年〜)で世界的評価を獲得し、その後も自身の思索そのものをダイアグラム(図式絵画)に表した作品を発表しました。展示している2作品も読む絵画」として楽しんでください。岐阜県養老市の「養老天命反転地」は広大な敷地に傾いた建物や椅子などが配置され、身体感覚や常識を問い直すことのできる荒川氏の代表作の一つで、観光地としても人気のスポットです。

© 2020 Reversible Destiny Foundation. Reproduced with permission of the Reversible Destiny Foundation



建島哲氏、秋元雄史氏を審査員に迎えた、新進芸術家を発掘する絵画公募プロジェクト。公募作から、巨大なキャンパスの入選作品1点を選出しました。

まつながえみ

《アカツクワンダーランド》

※展示場所については2F展示場所MAPをご参照ください。

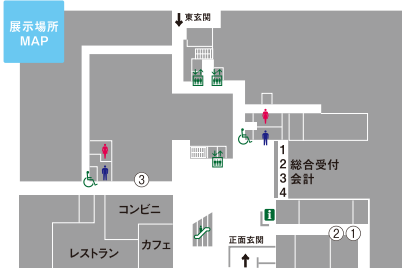
昼と夜の入り混じった夕暮れ時の光
風景が輝き出す瞬間
自然、空気、時間、出会った人々
いろんなものから力をもらって
前を向いて生きていく。
未来に向かって進んでいく。

作家プロフィール

2003年 倉敷芸術科学大学芸術学部美術学科卒業
2005年 倉敷芸術科学大学大学院修士課程芸術専攻美術研究科修了
2005年 東京を中心に個展、グループ展を開催
2006年 倉敷現代アートセンター(現日本 大原美術館(岡山))JFEスチール賞
夢広場はるひびエナジーレはるひ美術館(愛知)町民賞
2006年 5days JENAS FACTORY ART AWARD 2006 グランプリ賞
高知市文化プラザカネハートと(高知)県庁舎
2009年 VOCA展 上野の森美術館(東京)入選
2011年 SICF12(東京)入選

秋元 雄史 (東京藝術大学名誉教授)

「アカツクワンダーランド」は、4.5m×2mの大作である。まっとう診療室の大きな壁に包みこらる。この作品は、目の出處のほかに明るくなった時間帯の森を描いている。一種の幻想世界かなと思う。斜めから差し込む光が空間を満たして高全体に広がっていき、植物はシルエットになっている。朝を迎えるときの独特な静けさをもった時間帯だ。この作品は、診療室を持つ人たちや療養している人たちの心の憩みになるだろう。



癒しを感じる× 落ち着かせる

緊張感や不安な気持ちを癒すことができる
写真作品を展示しています。

展示作品リスト

- ① 岩宮武二〈新緑(嵐山)〉
- ② 岩宮武二〈苔(西芳寺)〉
- ③「BiG-i Art Collection 2013」公募入選作品展示

岩宮武二

(いわみやたけじ 1920-1984年 鳥取県米子市生まれ)

写真館を営む伯父の影響で写真家を志す。1939年に安井仲治、上田備山に能力を認められて大阪の丹平写真倶楽部に入会し指導を受けた。1954年の第2回フジ・フォトコンテストで「マヌカン」がカラー部門で金賞、続いて「炭鉱夫」がモノクロのプロ部門で銅賞を受賞し、写真界でデビューします。その後は主に佐渡や日本海をテーマとした作品を多く撮影し、1960年代以降には京都や奈良の伝統的な形とデザインに興味を寄せた作品を発表します。ここで展示する2作品からは、落ち着いた和の雰囲気が感じられます。



- ①〈新緑(嵐山)〉
- ②〈苔(西芳寺)〉

その他の展示作品

マルコ・バルビエ

《ロッテルダム橋》

松本美千代

《龍》

タケール・ジュレスタ

《無題》



大阪国際がんセンター「アートな病院プロジェクト」

2017年3月の移転・オープンにともない、「患者の視点に立脚したサービスの提供」の一環として「アートな病院プロジェクト」を立ち上げ、大阪府が所蔵する美術作品(大阪府20世紀美術コレクション)を外来および病棟の各フロアに展示しています。多くの方が来訪する2階および3階の外来には「アートストリート」を設け、主要な作家のアート作品を多数展示しています。



大阪府20世紀美術コレクション

大阪府では国内外の20世紀後半の美術作品を中心に、約7,900点におよぶ、さまざまな美術作品を「大阪府20世紀美術コレクション」として所蔵しています。「関西の現代作家コレクション」「世界の現代美術」「現代版画コレクション」「現代写真コレクション」など、絵画を中心に、写真や版画作品も多数あり、それらの管理と活用は大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]が行っています。enoco館内での年数回の企画展のほか、外部への貸し出しやアートコーディネートも積極的に行っており、医療機関では大阪精神医療センターなどにも作品が展示されています。

表紙の作品: 須田昶太〈作品〉

展示場所:2F(MAP④)

鑑賞に際してのお願い

- ・作品にはお手を触れないでください。
- ・作品や展示風景の写真・ビデオ撮影はご遠慮ください。
- ・診察や検査へお越しの方の通行の妨げにならないようご注意ください。



大阪国際がんセンターについて

当センターは、患者の視点に立脚した高度ながん医療の提供と開発を理念に掲げ、都道府県がん診療連携拠点病院・特定機能病院として国内トップクラスの先進的ながん治療に取り組んでいます。また、国際的な医療貢献、次世代がん医療の研究開発、がん予防の取り組みを積極的に推進しています。がんストレス対策としては、アート作品の展示、クラシックコンサートの開催など、患者さんの癒しにつながる取り組みを進めています。



お問い合わせ

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪国際がんセンター事務局

〒541-8567

大阪市中央区大手前3丁目1番69号

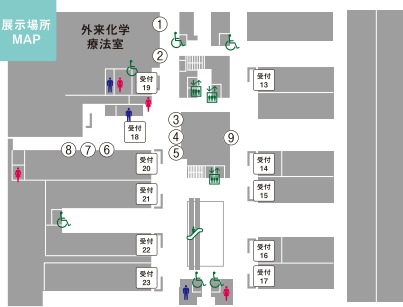
電話: 06-6945-1181 (代表) 内線5105

FAX:06-6945-1900

https://oici.jp/

ガイドマップ全図: 編集:大阪府立江之子島文化芸術創造センター[enoco]

このフロアでは「アートな病院」の顔となるような代表的な作品を展示しています。
みずみずしいモチーフを大判プリントに描出した作品で、
生き生きとした気持ちになるような空間を演出します。



展示作品リスト

- ① 桜井貞夫(BANLIEUE)1983年
- ② 桜井貞夫
(NOTRE TERRE NOURRICIERE)1990年
- ③ 井田照一
(SURFACE IS THE BETWEEN-BETWEEN
VERTICAL AND HORIZON-DECEDED
TRIANGLE-CIRCLE)1987年
- ④ 須田昶太〈作品〉1956年頃
- ⑤ 松本受〈植物図鑑 桃—B〉1972年
- ⑥ 津田洋南〈朝つゆ(大桑村)〉1987年
- ⑦ 津田洋南〈春色の川面〉1988年
- ⑧ 津田洋南〈黄金に染めて〉1988年
- ⑨ まつながえみ〈アカツクワンダーランド〉
/大阪国際がんセンター「絵画公募プロジェクト」入選作品



- ⑥〈朝つゆ(大桑村)〉
- ⑦〈春色の川面〉
- ⑧〈黄金に染めて〉

津田洋南

(つだようは 1923-2014年 奈良県吉野郡大塔村<現・五條市>生まれ)

1943年、日本大学芸術学部映画科から学徒出陣により海軍入隊。戦後は、大阪写真美術専門学校で学んだのち、1949年に国内最古のアマチュア写真家団体である浪華写真倶楽部に入会し、関西を拠点に活動しました。

大台ヶ原の原生林との出会いをきっかけに、1960年代以降は日本の樹木や水などをテーマにしたカラー写真を発表。自然のみずみずしさが豊かに写し出された3作品は、訪れる人々に安らぎを与えてくれます。



須田昶太

力強い構図や色彩が印象的な須田昶太の抽象画。本作は大胆な構図ながらも温かみのある色調で描かれ、人々の心を和ませます。

- ④〈作品〉

Osaka International Cancer Institute

The Artful Hospital Project 2025



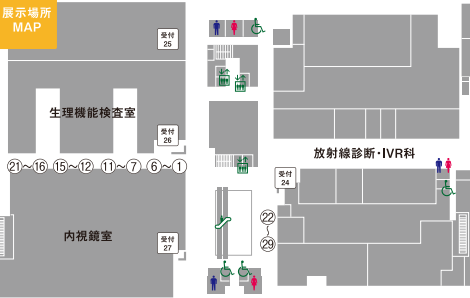
特定機能病院 / 地方独立行政法人 大阪府立病院機構

大阪国際がんセンター

大阪国際がんセンター 「アートな病院」プロジェクト



さまざまな人が行き交う場所であることから
懐かしさを感じる落ち着いた作品や、
患者さん同士や当センター職員との会話の糸口になるような
親しみを感じさせる作品を展示しています。



展示作品リスト

- ① 浅野竹二〈くちなし〉1950年
- ② 浅野竹二〈冬枯〉1950年
- ③ 浅野竹二〈夜のサーカス〉1955年
- ④ 浅野竹二〈サーカスの象〉1955年
- ⑤ 浅野竹二〈釣り人〉1975年
- ⑥ 浅野竹二〈夏の渡船〉1961年
- ⑦ 浅野竹二〈祭りの船A〉1964年
- ⑧ 浅野竹二〈太鼓たたき〉1965年
- ⑨ 浅野竹二〈入江〉1965年
- ⑩ 浅野竹二〈山A〉1959年
- ⑪ 浅野竹二〈鳥たちと汽車〉1973年
- ⑫ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-01)団扇・花〉1976年後刷り
- ⑬ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-03)壺・琉球模様〉1976年後刷り
- ⑭ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-04)向日葵之臺〉1976年後刷り
- ⑮ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-05)壺・風景〉1976年後刷り
- ⑯ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-11)山蛾〉1976年後刷り
- ⑰ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-06)水・光・土〉1976年後刷り
- ⑱ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-07)野菊の園〉1976年後刷り
- ⑲ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-08)竹林三倉〉1976年後刷り
- ⑳ 富本憲吉〈自刻版画集(12点組-12)石櫛〉1976年後刷り
- ㉑ 須田昶太〈バイヨンヌホテル前〉1983年
- ㉒ 須田昶太〈サンミッシェル村〉1983年
- ㉓ 須田昶太〈サンミッシェル村の食堂のホテル〉1983年
- ㉔ 須田昶太〈ヒレネーの谷のレストランにて〉1983年
- ㉕ 須田昶太〈グレンナムホテル〉1987年
- ㉖ 須田昶太〈アムステルダム ライデン市〉1989年
- ㉗ 須田昶太〈アムステルダムの運河〉1989年
- ㉘ 須田昶太〈ライデン市街の石畳〉1989年



- ㉓〈サンミッシェル村〉



- ㉖〈ヒレネーの谷のレストランにて〉

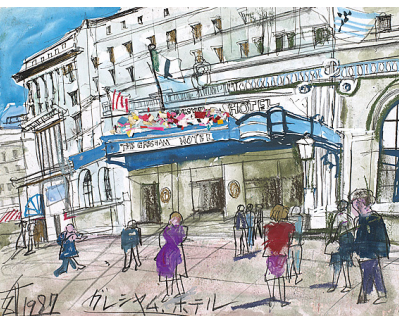
須田昶太

(すだこうた 1906-1990年 埼玉県上町<現・鴻巣市>生まれ)

埼玉県立熊谷中学校(旧制)卒業後、浦和で独学にて絵を学び、1927年、寺内萬治郎によって画家としての才能を見いだされます。戦前から戦後にかけて、文展、新文展、日展などに具象作品を出品し、特選を受賞するなど、画壇でも名を馳せる存在になりました。30代の半ばに伝統芸術に倦れて関西へ移り住み、京都や奈良で作品を制作。また、関西の文化人が集う「転石会」などを通じて長谷川三郎と出会い、彼らから大きな影響を受け、官展と決別し、国画会で抽象絵画を手がけました。

1971年からは週刊朝日で司馬遼太郎の連載「街道をゆく」挿絵を担当し、ここで再び具象絵画へ。須田昶太独特の力強い、生命力あふれた画風で街並みや人々の営みを表現しています。以後、須田は抽象と具象の両方の分野にわたって活躍することになります。

ここでは「街道をゆく」シリーズから「南蛮のみち」の挿絵原画を紹介し、フランス、スペイン、オランダなど、人々の暮らしを見て旅しているような気分へと誘います。



- ㉘〈グレンナムホテル〉